

1 しびれ感の意味と意義

POINT

- 「しびれ」は日常語・一般語であり、したがって様々の病態で訴えられる。
- 「しびれ」には4つの要素、すなわち侵害受容性（感覚）、侵害防御性（運動）、認知症、情動-感情性の要素が関与する。
- 「しびれ/しびれ感」は身体的不調の現れであったり、神経疾患や多くの内科的疾患の最初の気づきであったりするだけでなく、その局在や性質から診断のヒントになる。

はじめに

「しびれ」または「しびれ感」を表題にした本格的書籍は知る限り、2015年に発刊された“Paresthesia: a revised and updated study”¹⁾と2017年に発刊された「しびれ感」(日本神経治療学会)²⁾の2冊しかない。神経診察や神経症候を扱った書籍でも、解剖や疾患に伴った章立てがなされていることがほとんどで、わずかに症候別主体のものがある³⁾が、頭痛やめまいはあっても「しびれ/しびれ感」を立てているのは自著「神経症状の診かた・考えかた—General Neurologyのすすめ」⁴⁾だけかもしれない。それほどにテーマとして扱いにくいのだと思われる。本章では「しびれ/しびれ感」の言葉としての意味と臨床におけるその意義について概説する。

「しびれ/しびれ感」の意味

「しびれ」は日常語・一般語であり、したがって多義語である。主観的であるだけにその意味するところは極めて多様で、人・時・場所で異なる。しびれ感を訴える人を診るとき、その内容を「しびれ」という言葉を使わずにできるだけ詳しく表現してもらうことが大切である。そうは言っても、なかなか他の表現ができない人も多いため、ジンジン、ピリピリ、ビリビリ、チクチクなどオノマトペを用いた表現や針や剣山で刺される、電気が走る、圧迫されるよう、皮一枚隔てた感じ、麻酔をかけられたようななどの表現を例示して訊き出しておきたい。実際、口渴や舞踏様不随意運動のことを「しびれ」と表現していた患者がいた。

1. 国語辞典から

医学的な解釈の前に、まずいくつかの国語辞典の解釈をみておこう。手元にある小さな辞典（新明解国語辞典 第四版、1993、三省堂）では、「しびれ（痺れ）」＝「痺れること（痺れた状態）」と同語反復的でそっけないが、「しびれる（痺れる）」の方に⊖として「強い・（異常な）刺激を受けて、からだのその部分が普通と違って自由に動かせなくなる」とあり、結果としての運動障害に重きが置かれている。この続きに⊖として「強い刺激を受けて、うっとりとなる」とあり、精神的なある種の興奮を表す場合に用いられていることがわかる。

もっと大部で詳しい辞典（精選版日本国語大辞典 第二巻、2006、小学館）では、漢字の「痺」が当てられ、「（動詞「しびれる（痺）」の連用形の名詞化）。感覚異常の一つ。神経系あるいは循環系の障害により、運動神経、または知覚神経が侵された状態となり、運動麻痺、知覚麻痺を起こす」とより医学的な説明がされている。さらに「しびれが切れる」、「しびれを切らす」の説明として「① 長くすわっていたりしたために、血液の循環が悪くなって足の感覚がなくなる」に加え「② 待ち遠しくて、我慢できなくなる」と述べられている。この②や上記の⊖は座って長く待ち続けると①の状態になることから、身体的な「しびれ」が精神的な「しびれ」へと意味が比喩的に拡大されたものと思われる。いずれにしても、医学的な「しびれ」にも⊖や①の末梢の内容だけではなく、⊖や②のような精神的・心理的な側面も持っていることに留意しておく必要がある。さらに⊖などにみるように、「しびれ」は感覚・知覚の症状だけでなく、運動麻痺の表現のこともあるので注意すべきである。したがって感覚・知覚の症状であることを強調・明示する場合は「しびれ感」が用いられる。

2. 漢和辞典から

「しびれ」の日本語としての語源ははっきりしないが、「しばれる」と同根という考えもある。室町時代（14～16世紀）には「しびり」であったようで、狂言の演目に「痿痢/痺（しびり）」というのがあり、「正座後のしびれ」によって動けないことが面白く扱われている。なお江戸時代の19世紀初めの歌舞伎の演目「花霞名盛扇」には「わたしもしびりを切らして、お前の方へ出かけて行かうと思うた矢先、ちょうどよい所でお目にかかりました」というセリフがある⁵⁾。

精選版日本国語大辞典では和玉篇（宋時代の漢字典から15世紀後半に整備された最も古い漢和辞典）が紹介されており、国立国会図書館からデジタルで公開されている写本を見ると、「痺」に「ヒルム」（氣力がくじけるの意？）と解説困難な2語が対応し、「痿」に「ヒルム」と「アシナヘ」（足萎え）が対応している。「痺」の本字は「痺」であるとされているが、和玉篇にはその字はなく、そのまた本字かもしれない「病ダレに畢」という字に「アシノケ」（足病）が対応している。本邦で最も大きい大漢和辞典（大修館書店）では「痺」は「うづらの雌」のことであり、「痺」の代わりに用いるのは誤りとしている。現代の漢和辞典（大漢語林、1992、大修館書店）では、「痿」の解釈として「①血液の循環が不調で肢体の感覚がなくなること。表面的で痛いのを痺といい、内部的で痛くないのを痿という。②なえる。力がなくなり、ぐにゃぐにゃになる。しびれて役に立たなくなる。③いざる。また、あしなえ。足の立たない者」とある。「痢」の方は和玉篇では「クソヒリノヤマヒ」（下痢の意）に対応し、現在でも「下痢」などに使われており、「しびれ」との直接的な関連は窺われない。「痿痢（しびり）」ではおそらく単なる接尾語として採用されたのだろう。いずれにしても、「しびり/しびれ」はその当初から、知覚（感覚）麻痺から来る運動麻痺を意味していたと思われる。

なお、「しびれ」に対して、漢字の本家の中国では現在「麻」（本字は「癘」；「癘」ではない）が用いられている。いずれにしても「麻痺」は原義的にみてやはり運動麻痺と知覚（感覚）麻痺（感覚異常）の両方を含みうるということがわかる。

3. 医学辞典と神経学教科書から

現代の日本語による医学辞典（南山堂医学大辞典⁶⁾）には「しびれ感」の項目があり、「[英 dysesthesia, paresthesia, numbness] 感覚過敏 hyperesthesia や異常感覚、感覚鈍麻 hypesthesia、ときに運動障害（力が入らない状態）をも意味する日常語で、本来の医学用語ではないが、感覚過敏や異常感覚の場合に用い

表 1

	Taber's cyclopedic medical dictionary, 16th (1990)	Companion to clinical neurology, 3rd (2009)
Paresthesia	Sensation of numbness, prickling , or tingling ; heightened sensitivity	Abnormal sensations as of tingling or burning in regions to which the nerve supply is impaired but not lost, and due to the generation of ectopic nerve impulses in dysfunctional axons
Dysesthesia	Abnormal sensations on the skin, such as experiencing a feeling of numbness, tingling, prickling, or burning or cutting pain	Painful sensations resulting from stimuli which are not normally painful, in the presence of alterations in the quality of other sensations. They occur commonly in the territory of a partially damaged peripheral nerve
Numbness	Lack of sensation in a part, esp. from cold	The subjective awareness the stimuli applied to the skin or mucosae are not perceived . A positive feeling from the numb area, which cannot be verbalized, is also often present.

ることが多い。感覚過敏は通常感覚刺激に対し正常以上に強く感じることで、異常感覚には、外的刺激が加えられた際に質的に異なった感覚を自覚する paresthesia の場合と、外的刺激がないにもかかわらずビリビリ、ジンジンなどと表される感覚を自覚する dysesthesia との場合がある」と解説されている。

この文中に出てくる paresthesia と dysesthesia の定義と使い分けについては、英語圏でも本邦でもいろいろな考え方があり、神経学用語集 改訂第3版⁷⁾では、その取り扱いについて「(1) dysesthesia, paresthesia に対し異常感覚、錯感覚のいずれかを対応させることはしない。(2) 日本語独自として異常感覚、錯感覚を用いる。前者は自発的に生ずる異常な自覚的感覚を指し、後者は外界から与えられた刺激とは異なって感ずる他覚的感覚(知覚)をいう。[(3) 以下は省略]」と定めている。確かに各種辞典や神経学教科書によっても定義が異なっているため、参考のため、最近の代表的なものを表1に示す^{6,8-10)}。英語は訳すともますますわかりにくくなったり混乱したりするので、そのままに示した。

DeJong's the neurologic examination, 7th (2013)	Adams and Victor's principles of neurology, 10th (2014)	南山堂医学大辞典, 第20版 (2015)
Abnormal spontaneous sensations experienced in the absence of specific stimulation (feeling of cold, warmth, numbness, tingling, burning, prickling, crawling, heaviness, compression, or itching)	Spontaneous positive, prickling sensation that is not unpleasant; usually described as "pins and needles"	外的刺激が加えられた際に質的に異なった感覚を自覚する
Unpleasant or painful perverted sensations, either spontaneous or after a normally nonpainful stimulus (e. g., burning in response to touch); often accompany paresthesia	Any abnormal sensation described as unpleasant by the patient	外的刺激がないにもかかわらずピリピリ、ジンジンなどと表される感覚を自覚する

「しびれ/しびれ感」を考える上では、その他の医学用語として、感覚過敏 (hyperesthesia: 与えられた刺激を強く感じる), 異痛症 (allodynia: 痛みを起こさないような軽微な刺激を強い痛みとして感じる), さらに感覚鈍麻 [hyp(o)esthesia: 与えられた刺激を鈍く感じる] ~ 感覚消失 (anesthesia) がある。上記用語集では「しびれ感」= “numbness” のように対応づけがなされているが、numbness は本来的には感覚鈍麻~消失のことであり、「麻酔をかけられたようなしびれ」という訴えによく対応する。針刺激を感じることはないが、決して無自覚的ではなく、腫れたような感じを伴うことが多く、pins-and-needles feeling (チクチク、針で刺されたよう) とか burning (焼け付く), tingling (ヒリヒリ) と表現される異常感覚を伴うこともある⁴⁾。

しびれ感の意義

しびれの自覚は最終的に脳でなされる。しびれの発症機序にとって、末梢の感